

『資本論』を超える資本論

危機・理論・主体

鎌倉孝夫編著 (社会評論社・2916円)

日本のアカデミズムや論壇では、1980年代までマルクス経済学が無視できない影響力を持っていた。現在、マルクス経済学ははじめなほどに退潮してしまつた。大学の就職予備校化、長時間労働、過度な競争による心身疾患の増大など日本の社会は深刻な問題を抱えている。これらの問題にマルクス経済学から光を与えると別の側面が見えてくる。大きな病気にかかった場合、主治医とは別の医師からセカンドオピニオンについて聞くようなつもりで、鎌倉孝夫氏(埼玉大学名誉教授、元東日本国際大学学長)の言説に耳を傾けてみよう。

14(H26).5.18 日新聞
動を基礎に形成される所得(賃金、利潤から支払われる配当・利子・地代等の所得)にしかない。労働価値説に立つマルクス経済学では、資本は自ら価値を増殖する運動体である。これが本来の現実資本だ。それに対して、土地を持っていれば地代、預金を持っていれば利子、株券を持っていれば配当というように、所有だけで、運動をせずに得られる所得を擬制資本(Hypothetisches Kapital)と呼ぶ。

ではない。それは社会的所得の再配分(収奪)によるものでしかない。鎌倉氏の業績は、マルクスが不十分にしか展開していない擬制資本というキーワードを用いて、株式を分析した点だ。擬制なので、こういう資本は本来成立し得ないことになる。

ところで、マルクス経済学は労働が価値の唯一の源泉であると考えられる。しかし、人間はモノではない。完全な商品になるこ

問題抱える日本経済へのセカンドオピニオン

実資本は、株式・証券価格のつり上げの手段とされている。株式・証券は、それ自体価値の根拠を持っていない擬制資本である。擬制資本としての株式・証券価格の根拠は、基本的には現実資本の運動によって形成される価値・剰余価値にしかない。あるいはこの現実資本の運

なぜ、フィクチャーフェス(擬制の、架空の)という形容詞を用いるかという点、それが人間労働という実体に基盤を持たないからだ。特に株は、将来の株価値を予測して売買が可能になる商品だ。△投機的利得を獲得する者が生じて、その利得は投機自体によって生み出されたもの

とはできない。労働力商品化も擬制としてしか成り立たないものである。資本主義を成り立たせている基礎の労働力商品化と、資本主義の最も発展した形態である株式資本が、ともに擬制としてしか成り立たないことを論証したところに鎌倉経済学の意義がある。『資本論』を超える

る資本論」というタイトルにも決して誇張はない。この方向で21世紀に『資本論』は読まれるべきだと思う。

かつて、日本のアカデミズムでは、経済理論と革命の実践運動を区別し、『資本論』の論理整合性と実証性を重視することを強調した宇野弘蔵(1897~1977年)の影響が強かった。宇野派の学者は、論理を基準に思索を営んでいたのであるから、ソ連崩壊の影響は本来受けなければならない。それにもかかわらず、社会主義体制崩壊の衝撃によって宇野派の大多数の学者がマルクス経済学から離脱してしまつた。逆説的であるが、ソ連型スターリン主義の影響が、宇野派を含む知識人に無視できない影響を与えていたということだ。その中で鎌倉氏のよ